



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	今と繋げる、自分で語る : 沖縄から学ぶヘリテージツーリズムの現在と未来
Author(s)	高崎, 優子
Description	セッション2: ヘリテージツーリズムの取組み
Relation	先住民文化遺産とツーリズム : 北海道の可能性(International Symposium: Indigenous Heritage and Tourism - Potential in Hokkaido). 2012年10月13日-14日. 北海道大学学術交流会館小講堂, 札幌市.
Issue Date	2012-10-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51255
Type	conference presentation
File Information	session2report5.pdf



International symposium 2012 Indigenous Cultural Heritage and Tourism

国際シンポジウム
先住民文化遺産とツーリズム
-北海道の可能性-

『今と繋げる、自分で語る：沖縄から学ぶヘリテージツーリズムの現在と未来』

高崎 優子

(北海道大学大学院文学研究科後期博士課程)



初めまして。プロジェクトメンバーの高崎と申します。専攻は社会学、環境社会学、地域社会学と呼ばれる分野に接続した研究を行っております。普段は沖縄で人々の生計戦略の変化や資源との関わり方などを調べています。さて、シンポジウムのタイトルである先住民文化遺産とツーリズムと本報告の関係についてまずご説明したいと思います。ツーリズムに関して言えば、実は私は懐疑的です。というのも、ちょうどこのシンポに向けてスライドをつくっていたこの間の朝、テレビに沖縄県宮古島の美しい海が映し出されました。ある連続テレビ小説の初回が始まったのです。沖縄が重要な舞台となっていました。そしてまさに同じ朝、沖縄県の上空にオスプレイが飛来しました。それはとても皮肉な朝でした。ツーリズムによる交流は、昔より随分と進んでいたはずですが。文化搾取のようなツーリズムは変化し、沖縄という場所の存在も、そこで暮らしを営んでいる人びとの存在も、ツーリズムを通して本土の人びとに浸透してきたはずでした。このテレビ小説も、舞台となったことによるツーリズム効果が期待されているはずですが。しかしまた、沖縄はツーリズムに裏切られたのではないだろうか。ツーリズムを通して近くなったはずなのに、こんなにも、本土は遠かった。あれだけ嫌だといったのに、またしても、その声は届かなかった。ドラマが映し出すような美しい海と白い砂浜、そして心優しい人びとしか、本土の人たちは必要としていないのではないだろうか？本当にツーリズムの可能性なんてあるのだろうか？私自身も知りたいと思っています。そしてまた、そこに人びとの実践がある限り、それを知らなくてはいけないとも考えています。

次に「北海道の可能性」という部分。北海道の可能性とあるのに、なぜ沖縄の事例なのか。戸惑っていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか？私もその戸惑いに深く共感します。

というのは冗談です。半分本当です。沖縄の事例で、とお話を頂いたとき、とても心配になりました。しかし昨日の基調講演、そして本日のこれまでの報告から、同じ線の上の話だと改めて確認し、同じ思いを分かち合うことを嬉しく思い、また、安堵しています。たしかに、沖縄とアイヌとは異なる点があります。例えば、沖縄の人々は現在、先住民として認められているわけではありません（注：2008年国連自由権規約人権委員会が日本政府に勧告）。権利への要望はありますが、先住民として認められたい、とう機運は統一的なものではないように思います。また、彼らには土地があります。その使用には幾多の制限はありますが。そして、沖縄という地では、沖縄出身者は多数派です。そのような違いはありますが、しかし、同じ日本という国家において、現在はその周縁に位置しながらも独自の歴史を歩んできたこと、その歴史と風土から形成された個性豊かな文化を持つこと、社会変動の中でその継承が問題となっていることなど、アイヌの方々と共通する点が多くあります。共通する課題が多いということ、そしてやはり、同じ「国内」で連携がとれやすいということ、そして一度限りではなく、継続した仲間、継続した相談相手になってほしい、という理由から、二年前、当時のプロジェクトメンバーで沖縄に視察研修にも行きました。本日見る事例も、その時からお世話になっている事例が中心です。従って、本日最後のパネルなのですが、北海道から大分下り、遠く南の島の人々のヘリテージとツーリズムを巡る実践から、私たちが学べることをご報告していきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

沖縄の位置、事例地の場所

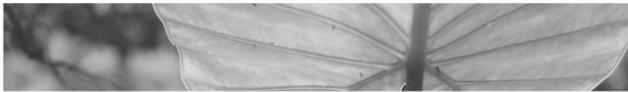
Location of Okinawa



1. ではまず、沖縄の位置の確認です。現在いるのが上の赤い点になります。右側が今回の事例地の地図。沖縄は大きく八重山、宮古、そして沖縄本島の3つからなりますが、今回の報告事例は本島になります。二つ申し上げておきたいことがあります。ひとつは、今後の我々の活動に活かすため、事例となるのは必ずしも考古学の対象となるような事例に限らないということです。また、時間の関係上、それぞれの事例の実務的な部分、事業計画や収益性などに触れることはできません。こちらの方は、今後もしお役に立てる機会がありましたらその際にお話ししたいと思います。

construction

1 ヘリテージ、ツーリズム
WHAT IS HERITAGE? WHAT IS TOURISM?



2 足元にある物語
VARIOUS PRACTICES IN OKINAWA



3 今と繋げる、自分で語る
THINK ABOUT THE FUTURE

2. 今回の発表の構成です。第1部でヘリテージとは何か、ツーリズムは何をもたらすのかということをお話しし、第2部で沖縄の人びとの実践を見ていき、そして第3部でこれからへ向けてのことを考えたいと思っています。

1 ヘリテージ、ツーリズム
WHAT IS HERITAGE? WHAT IS TOURISM?

3. ではまず人々にとってヘリテージとは何か？ツーリズムとは何か？というところからはじめたいと思います。

ヘリテージとは何か *Is This a Heritage?*



4. 昨日からくり返し、ヘリテージとは何か、ということが議題に登っています。その内容からみなさんお感じになられたと思うのですが、現在ヘリテージを巡る国際議論はかなり進み、近年では無形文化遺産などの概念も定着してきています。また、遺産を固定化されたモノではなく、有機的なシステムとして捉える考え方も進んでいます。

では、あらためて、この石は遺産でしょうか？この写真は久高島という島で今年の夏に撮影したものです。

久高では土地は神のものとされ、その私有が現在でも認められていません。人びとは島から借りるという形で土地を使用しています。不平等が生じないように細かく分けられた土地は、このように容易に動かせる小さな石で区切られています。数百年の昔から、このような小さな石が土地の境界線をなしてきたのです。とはいえ、石自体は特別なものではなく、必要に応じて拾って使う、よくある石です。ではこの石はただの石でしょうか？それとも、管理、保全、活用すべき石でしょうか？遺産とはそもそも何を指しているのでしょうか？

世界遺産というヘリテージ

The World Heritage

『琉球王国のグスク及び関連遺産群』

Gusuku Sites and Related Properties of the Kingdom of Ryukyu



首里城跡
園比屋武御嶽石門
玉陵
識名園
今帰仁城跡
勝連城跡
座喜味城跡
中城城跡
斎場御嶽



World Heritage
Heritage is our legacy from the past, what we live with today, and what we pass on to future generations. Our cultural and natural heritage are both irreplaceable sources of life and inspiration. Places as unique and diverse as the wilds of East Africa, the Serengeti, the Pyramids of Egypt, the Great Barrier Reef in Australia and the Baroque cathedrals of Latin America make up our world's heritage.
<http://whc.unesco.org/en/about/>

5. 世界遺産が遺産であることにおそらく異論はないでしょう。というわけでまず、世界遺産を巡る実践を見ていきます。沖縄という地は近代以降、時に国家に内部化され、時に外部化されるという歴史を歩んできました。一方で現在に至るまで決してナショナルには収斂されきれない、独自の物語を有しています。たとえば、沖縄は15世紀から19世紀まで琉球王国という一つの王国でした。その関連遺産群が世界遺産に指定されています。これら全ての遺産群において、教育委員会などの文化財講座を修了した有志によるボランティアガイドを受けることが出来ます。彼らのガイドは非常に情熱的で、ともすれば教科書的で平坦になりがちなグラウンドストーリーを実に生き生きと語ってくれます。みなさんも沖縄を訪れた際にはぜひ、体験されることをおすすめします。

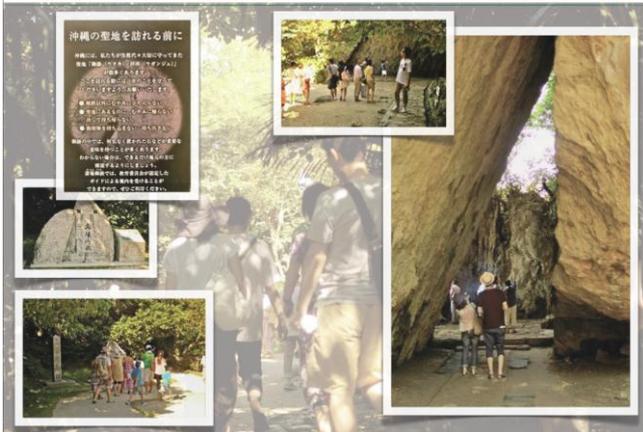
オーセンティシティ、アイデンティティ *Authenticity, Identity*



6. さて、遺産群の中心をなす首里城公園は、県内観光客の実に1/3以上が訪れる、一大観光スポットとなっています。人びとが目にする壮麗な朱塗りの正殿などは復元されたもので、世界遺産指定を受けているのは遺構部分になります。しかし人びとにとっては遺構の保全の他に、正殿などの復元こそが重要な関心事でした。それはやや単純化して述べればオーセンティシティ、真正性の問題ではなくアイデンティティの問題です。首里城はさきの第二次世界大戦時に日本軍の大営本部が置かれ、激しい戦火に巻き込まれて焼け落ちています。「首里城の復元なしに沖縄の戦後は終わらない」というのが復元事業にあたっての人びとのかけ言葉で、現在に至るまで真摯な活動が続いています。もちろん、ここに表明された歴史は正調の歴史であって、内にあるのは権力の歴史である点には留意しなくてははいけません。では、世界遺産に指定されていない部分は人びとにとって遺産ではないのでしょうか？

世界遺産という負荷

Trouble with OUV



7. さて、世界遺産という冠は時に苛烈な負荷を強めます。齊場御嶽というのは王国最高の御嶽として位置付けられた御嶽です。御嶽というのは祭祀空間のことです。沖縄ではこの祭祀空間と観光をどう両立させるか、というのは大きな課題の一つです。齊場御嶽を管理している南城市はここはあくまで聖域であるとの姿勢を貫いています。御嶽というのは本来はその集団内でしか共有されない非常にプライベートな空間であり、また、日常的に入る場所でもありません。市は齊場御嶽を開放する一方で負荷対策として入域料の徴収や休息日の設定を行っています。制限理由を公式サイトで公開したり、インタープリテーションを行ったりと様々な角度から理解を促していますが、現状は厳しく、本来の姿である男子の入域制限も行うべきだなどの声もあがっています。

レジャーと信仰のはざままで *the Beach, the Belief*



8. もう少し、信仰と観光の関係について、そして観光がもたらす負荷についてお話ししたいと思います。

隆起サンゴからなる沖縄列島は、青く美しい海に四方を囲まれたリゾート地でもあります。そこで、人々の生活に十分な敬意が払われているとは言い難い状況が多々生まれています。例えば左上の写真では竜宮神の祠に観光客の荷物が散乱しています。右写真の島では拝所にいたる道にゲートを設置しました。真ん中のように、礼節を呼びかける貼り紙がされたりもします。

ツーリズムとは何か *Is Tourism Really Good?*



9. ある離島では、悲願とも言える本島との架橋後に、生活環境が激変しました。観光客が押し寄せ、地価が上がり、売地が増え、本土からの移住者やセカンドハウスが急増し、大規模開発も始まっています。狭い島はレンタカーが走り回るようになり、通りでは子供たちが遊ぶこともお年寄りたちが語らうこともなくなりました。ここは人類発祥の言い伝えを持つほどの非常に古い歴史を持つ島ですが、大変心苦しいことに、そのことが訪れる人たちの土地へのリスペクトに結びついていません。生活文化や文化遺産などへの関心は呼び覚まされておらず、結果、住民の生活が軽視され、集落環境が悪化するというループに陥っています。ツーリズムには、確かにこのような側面があるのです。

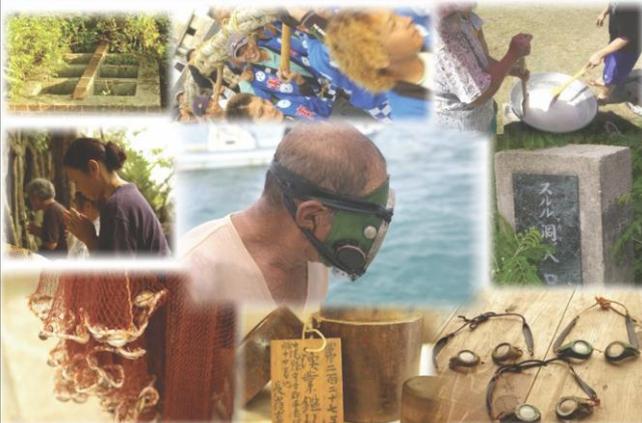
2 足元にある物語

VARIOUS PRACTICES IN OKINAWA

10. さて、このような課題をもつツーリズム、そしてヘリテージですが、人々は実際にヘリテージツーリズムの現場で、どのような実践を行っているのでしょうか。見ていきたいと思えます。

変動の中で

What We Need in a Social Change

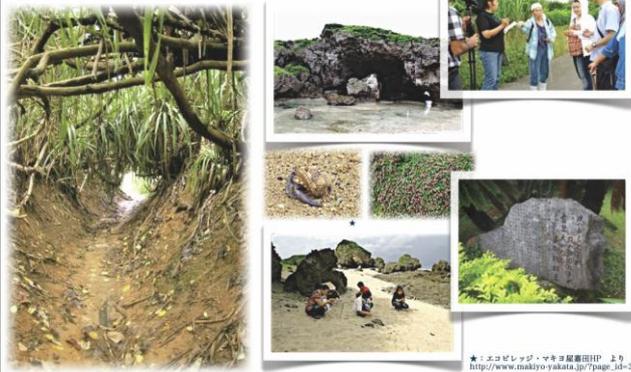


11. 現在、沖縄では自分たちの足元にある遺産への注目が高まっています。それは沖縄という社会全体が変動の過程にあるからです。復帰後に生まれた世代が現役世代となり、離島や地方からの人口流出は止まず、一方で内地からの移住者が増えている。県外で教育を受ける子供達も増え、産業の変化により慣行的共同作業が減少し、祭りの稽古に割く時間もなかなかとれなくなっている。若者の多くは島言葉を聞くことは出来ても話すことは難しいと言います。また、豊かさを誇った自然環境も開発や気候変動の影響で激変している。そのような変動の過程にあって、文化、というか先人たちの生き方や態度といった方が近いように思うのですが、人々はそれを先代からの遺産として捉え、その理解と継承とを目指した様々な試みが始められています。その試みがツーリズムという手法と結びついている、大まかに述べればそれが現在の沖縄のヘリテージツーリズムの主流となっています。そしてそれらの実践にはいくつかの共通した特徴が見られます。

小さな遺産への着目

The Gaze to Private Heritage

屋嘉田潟原×恩納村エコツーリズム研究会



★：エコビレッジ・マキノ原農園HP より
http://www.akitoyakata.jp/?page_id=37

12. まず一つ目が、すでに申し上げたように小さな遺産に注目すること。そして、それを語り (narrative) の力によって引き揚げるという手法です。

例えば、恩納村という高級リゾートが立ち並ぶエリアがあります。そこから少し離れた場所で、恩納村エコツーリズム研究会という団体が屋嘉田潟原という干潟を中心としたツアーを展開しています。彼女たちの活動は、自らを取り巻く環境を先人達が創り上げた自然の理にかなった風景として捉え、そのような自然との関わり方そのものを知り、使い、守ることを目的としています。

ツアーにおいては、集落の農道を抜けて海岸に出るまで、一見すればドラマティックではない道が続きます。その道を、気負いのない、日常の会話の延長のような語りを聞きながら歩いて行きます。個人的な関わり、思い、記憶、そして間に入る確かな知識。その何気ない語りによって周囲の環境全体が受け継ぐべき遺産として私たち来訪者の前に浮かび上がる、そういうプログラムになっています。

自分たちで掘り起こす

They Found Heritage by Themselves

比地集落×NPO法人国頭ツーリズム協会

<http://kuta-okinawa.org/aim.htm>



与那集落×与那共同店×ユナムンダクマ協議会



★：与那集落HP より
http://yomakibon.jp/da_jari/02012_02.html

13. 次に、自分たち自身で物語の掘り起こしを行うということ。国頭村の比地という集落は、村の事業を利用し、地元NPOと組んでガイドブックを完成させました。このNPOは100年後も人びとが住み続けられる村であるよう、土地に合ったツーリズムの形態を模索することを目的としています。同じ村内にある与那集落はガイドブックを作成した後、更に国交省の事業を利用してガイドツアーを始めました。聞き書きや実地調査を重ね、ガイドブックやヘリテージツアーという実体化に至る過程を指して、ある男性は「自分たちの宝を見つけた喜び」と話してくれました。その喜びが次の活動の契機となっていく、と。与那集落は活動の中で100年前の旧道を自分たちで復活させ、維持管理するようになりました。

生きていく場所として

The Place We Live on

久高島×NPO法人久高島振興会



14. 共通点の三点目は、人々は遺産を含む場所全体を、「自分たちがこれからも生きていく場所」として捉えているということです。久高島では久高島振興会というNPO法人が中心となって集落のヘリテージツアーを実施しています。振興会の理念はシンプルで、この島をこれからも生きていく場所として位置づける、ということです。

経済的需要と生業の現状から、人びとにとって遺産を資源化し、そこから収益を得るという行為は非常に、非常に重要な行為です。一方で人々は自分たちの生活環境を大きく変えてまで遺産を資源化することは望んでいません。先人たちの歩みを受け継ぐことは、自分たちが生きやすい社会を築いていく上で不可欠な要素である、との考えがそこにはあります。自分たちが属する社会全体のサステナビリティを考え、その実現の手段の一つとしてヘリテージツアーという手法が選択されている、それが、現在の沖縄の人びとの実践です。

3 今と繋げる、自分で語る

THINK ABOUT THE FUTURE

15. では最後に、これまでの事例を元に、私たちが目指すべきヘリテージツーリズムのこれからを考えたいと思います。

ヘリテージとは何か

Tangible, Intangible



16. さて、改めて、この石は遺産でしょうか。この小さな石は容易に動かせません。動かせるけれども、動かさない。そういう人と人、人と自然の関係が、この島には確かに息づいている。そうすると、この世界観は彼らにとってまさに受け継いでいくべき遺産です。わたしたちはこの石を見ることによって、そしてその語りを聞くことによって、久高という島の世界観を垣間見ることになり、島への敬意が生まれます。ヘリテージがもつ力とは、本来このようなものだと思います。

そして、この石に「効き目」があるのはそこに社会的合意が成立しているからです。かつ、この土地に生産性が認められるという経済的状況も必要です。ヘリテージを継承していくということは、この石が意味を持ちうる社会に敬意を払い、その社会を皆で持続させていくということでもあります。

ヘリテージツーリズムのこれから

What We Should Aim at

「今」と繋げる

ヘリテージは過去の「遺物」ではない。場所が消費されないために

「自分で」語る

知識と経験の往復。真正性の担保という課題

人びとの生の充実のために

少しずつ未来へ進む。様々な立場の協働



17. そのためには、ツーリズムはどのようにあるべきでしょうか。昨日から続く講演、報告の流れに重なるところが多く、従って今では「確認」の意味も含まれますが、まず、ヘリテージは過去の「遺物」ではない、という態度が必要です。ましてや単なる観光資源でもありません。第1部で見たように、自然や環境への関心だけでは、人々の生活に負荷がかかります。従ってきちんと文化を伝えていく必要がある。一方で、遺産を過去にのみ属したのものとして捉えると、現在の暮らしが軽視されることもある。ヘリテージの存在が現在の生活に繋がってこそ、その場所を訪れる人々がそこに暮らす人びとの存在を尊重するようになります。遺産とは、言い換えればかつての人々の生活の規範が可視化されたものです。継承する当事者も、モノ (object) としての継承ではなく、そこに込められた規範(rule)、態度(attitude)を受け止めることと、それらの積み重ねの上に現在の生活が成り立っていると自覚することが必要で

しょう。そのことを発見、伝達する手段としてのツーリズムの在り方、今と過去とを繋げる方法を模索する必要があると考えます。

そうすると、遺産に関わりを持つ者が「自分で」語ること、「自分で」表現することが非常に重要となります。ツアーを経験するなかで、ガイドの方達の「自分たちが楽しむ」「個人的な経験や想いを語る」語り、過去と現在とを繋げていく瞬間に幾度も出会いました。そこには必ずしも事実 (*fact*) の比重は高くありませんでした。

とはいえ、語る者としてある程度のレベルの知識の習得は必要です。その機会の提供は行政や研究機関が行うことができます。重要なのは知識と経験との往復でしょう。このことの一つの実践として、プロジェクトでは昨年度、「経験」としての原田さんのイラストや手書きの文章と、「知識」としての印字の組み合わせというガイドブックを作成しました。

しかしこの手法は一方で、知識の真正性を誰が、どのように、そしてどこまで担保するのか、知識と経験との配分をどのように考えたらよいのか、という課題も抱えます。

この課題に向き合いながら、このような試みは更に続けていく必要があると考えています。

最後に、ヘリテージツーリズムは、それに関わる人々の生 (*Life*) の充実のために行うという姿勢をもつべきと考えます。どのような遺産も、結局は時代時代の人々の生の輝きが積み重なって作られてきたものです。それを次世代に繋げていくためには、今、現にそこに展開されている人々の生の充実が目指されてこそ、少しずつ未来へと進んでいくことが出来るのではないのでしょうか。遺産マネジメントのために、人々はそこで生活しているわけではありません。その点を見誤ると、現在浸透しつつある当事者参加やボトムアップ型の資源管理、ボトムアップ型のツーリズムデザインという潮流も名ばかりのものになってしまいます。ステークホルダー (注: 利害関係者) といえは聞こえはいいですが、遺産ありき、ツーリズムありきで自分たちの生が顧みられていない、という不満が人々の間に生じることも少なくありません。研究者が例え善意から出たものであれ、既に自分の中で定めた目標のために人びとの声を聞き、人びとと関わろうとするならば、それは当事者参加ではありません。我々の、そして人びとの生の充実を図るには、文化遺産をどのようなかたちで人々の間に介在させ、どのようなやり方で共有していけばよいのか。そのような発想が現場では求められているし行われています。遺産の価値の査定や保護に走りがちな専門家が、遺産継承を担う当事者や地域社会と組むことの意義の一つはこの点にあります。文化遺産をめぐる専門的知識と、当事者の思いとの架け橋としてこのワーキングプロジェクトが機能することを期待したいと思います。



18. 以上です。ご静聴ありがとうございました。

参考文献・資料

References

- 沖縄県平成23年度入城観光客統計概況（平成23年4月13日公表）、<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/26837.html> 2012.10.6 downloaded
- 内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所首里城地区利用状況、<http://www.dc.ogb.go.jp/kouen/shurijo/riyousha.html> 2012.10.6 downloaded
- 南城市公式サイト <http://www.city.nanjo.okinawa.jp/tourism/2011/11/sefa.html>
- * * * * *
- Figal, Gerald.
2008 Between war and tropics: Heritage tourism in postwar Okinawa, *PUBLIC HISTORIAN* 30(2): 83-107.
- 平成19年度国頭村地域人材育成講座編
『くんじゃん徒歩ナビ 沖縄県国頭村与那区編』・『くんじゃん徒歩ナビ 沖縄県国頭村比地区編』.
- ICOMOS
1999 International Cultural Tourism Charter (8th Draft for Adoption by ICOMOS at the 12th General Assembly, Mexico, October), ICOMOS International Scientific Committee on Cultural Tourism.
- ICOMOS
2002 International Cultural Tourism Charter, ICOMOS International Scientific Committee on Cultural Tourism.
- ILO
1989 C169 Indigenous and Tribal Peoples Convention, the International Cultural Tourism Committee.
- 国際会議「有形文化遺産と無形文化遺産の保護—統合的アプローチをめざして—」
2004 「有形文化遺産及び無形文化遺産の保護のための統合的アプローチに関する大和宣言」.
- 河野裕
1995 「文化遺産の保全と国際協力」, 風響社.
- 松井健 編
2004 「沖縄列島 シマの自然と伝統のゆくえ」, 東京大学出版会.
- 中西裕二
2007 「複数の民俗論、そして複数の日本論へ」, 岩本通弥編「ふるさと資源化と民俗学」: 229-252, 吉川弘文館.
- Notzke, Claudia.
1999 INDIGENEOUS TOURISM DEVELOPMENT IN THE ARCTIC, *Annals of Tourism Research* 26(1): 55-76.
- Nuryanti, Wiendu
1996, HERITAGE AND POSTMODERN TOURISM, *Annals of Tourism Research*, vol.23, No.2: 249-260.
- 小熊英二
1998 「日本人」の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで, 新曜社.
- テッサ・モーリス=鈴木著, 大川正彦訳
2003, 『辺境から眺める アイヌが経験する近代』, みすず書房.
- UNESCO
1972 Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage.
- 山村高淑
2012 「ヘリテージツーリズムと先住民文化観光」, 加藤博文・山村高淑編『先住民文化遺産とツーリズム アイヌ民族における文化遺産活用の理論と実践』: 35-44, 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 山村高淑・高崎優子・張慶在 編
2011, 『沖縄におけるガイドツアーの運営実体に関する事例調査報告書』, 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.